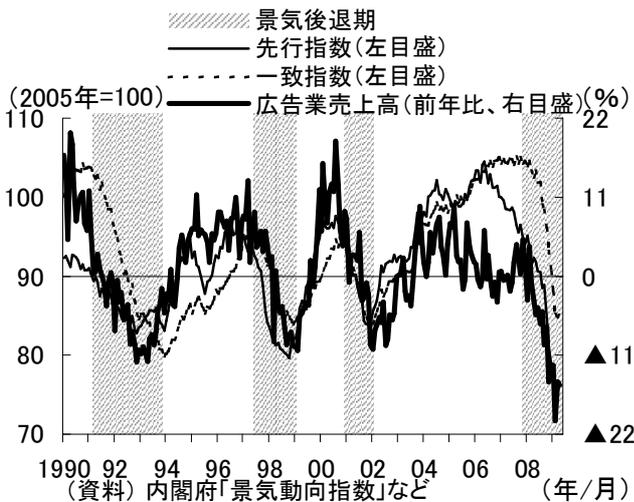


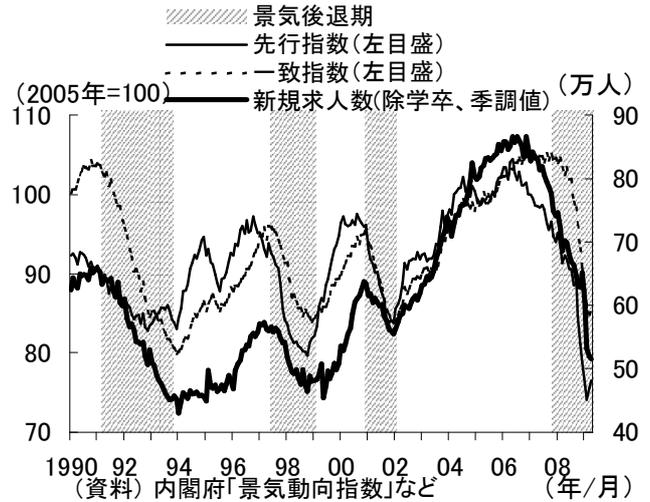
## 1～3月期に景気悪化終了は早計の懸念 ～ 企業活動は4月入り後も依然低調 ～

- (1) 景気悪化は1～3月で終了との見方が台頭。確かに4～6月期には実質GDPが前期比年率5%成長に転じる見込み。しかし、プラス成長の主因は昨年末の大幅な生産調整の反動。景気悪化が終息したかは依然不透明。具体的に景気情勢と関連の高い企業動向について直近の動きをみると、次の通り。
- (2) まず広告売上高と景気動向指数の推移をみると、広告売上高の減勢が横這いから縮小に転じた後、景気回復が過去の経験則（図表1）。しかし減勢が拡大から横這いに転じるには依然として至らず。加えて、今回のマイナス幅は既往最大。
- (3) 次に新規求人数と景気動向指数をみると、従来、新規求人数が減少から横這いへ転換、さらに増勢転換が景気回復のサイン（図表2）。しかし、4月でも減勢が引き続き拡大中。
- (4) 一方、産業用大口電力消費と鉱工業生産をみると、減勢縮小の兆しはみられるものの、依然として大幅なマイナス幅（図表3）。最後に、物・人流の視点から高速道路の車両通行台数をみると、4月以降、減勢が1～3月より拡大の兆しも（図表4）。
- (5) 以上を要すれば、4～6月で景気底入れとの見方は早計に過ぎる懸念大。1割弱に及ぶ既往最大のGDPギャップ下、調整圧力は今後も根強く残存。底割れのリスクは依然払拭されず。

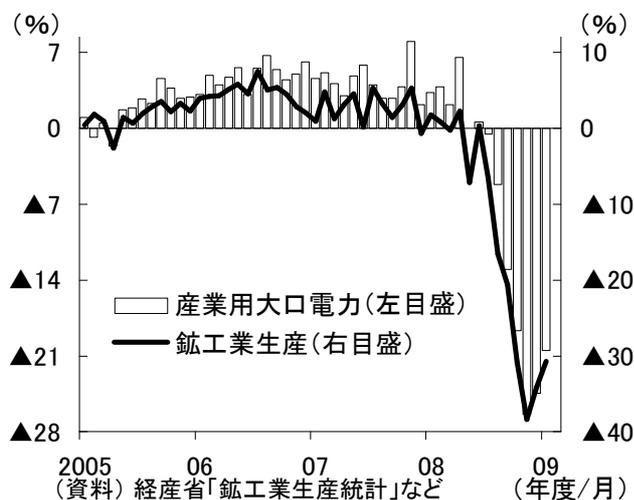
〔図表1〕景気動向指数と広告売上高の推移



〔図表2〕景気動向指数と新規求人数の推移



〔図表3〕産業用大口電力と鉱工業生産(前年比)



〔図表4〕高速道路通行車両台数の推移(前年比)

